

審査の結果の要旨

氏名 渡辺 裕

音楽が小説や絵画などと根本的に異なるのは、作品が鑑賞されるには演奏を必要とするという点にある。この演奏は、一回ごとに消えてゆくものであるがゆえに、論ずることの困難な主題である。渡辺氏の論文は、この問題に対する果敢な挑戦である。一般的通説によれば、「作品」は楽譜によって示されており、演奏は楽譜に忠実でなければならない。従って、所謂十九世紀的なヴィルテューオーゾらの演奏は、恣意的な解釈によって作品のあり方を歪めたものと見なされる。渡辺氏はこの通説への懐疑から出発し、十九世紀の音楽家たちが全く異なる演奏観を持っていたことを立証し、かれらの楽譜と演奏との関係に関する「共同主観的」な理解を解明し、この「演奏観」が歴史的に変化してゆくそのダイナミズムの根源に肉薄している。すなわち、楽譜に書かれるものと、書かれずに「口頭伝承」として作曲家から演奏家へ、そして師匠から弟子へと伝えられたものがあり、この両者が相まって個々の作品の実像をなしていること、そしてこの書かれるものと書かれざるものとの境界線そのものが時代的に変化してゆくこと、その変化は、古くからの伝承が新しい音楽観とぶつかり合い、新しいあり方が徐々に優勢を占めるような、絶えざる変貌の過程としてある、というのが渡辺氏の主張である。その研究は、過去の研究成果を踏まえつつ、次の三点において独自の方法と成果とを示している。

- (1) 演奏を論じた古い文献（ズルツァーやクヴァンツ、ツェルニーら）を自ら読み解釈を加えて、そこに反映している演奏観を明らかにしたこと、
- (2) ベートーヴェンのピアノ・ソナタの楽譜のなかでも、「原典版」と対比され、学問的には注目されてこなかった多くの「実用版」に注目し、それを上記の「口頭伝承」され「共同主観的」に受け入れられていた演奏法の証言として捉え活用したこと、
- (3) 同じく演奏史の史料として一九〇三年から一九九九年にわたる録音を積極的に取り上げ、客観的な処理法を用いて活用したこと。すなわち、特定の部分を取り上げて、一拍ごと、一小節ごとの時間を計測し、多くの演奏において共有されている特徴を実証的に示した（ここには労作という性格が際立っている）。

渡辺氏の研究は演奏法のなかでも、特にテンポとリズムの問題に集中しているが、演奏法の変化を捉える切り口として論じられているのは、アラ・ブレーヴェ、テンポ・ルパート、メヌエット、アルペジオ、そしてメトロノームなどである。これらの具体的な検討を通して、渡辺氏は、十九世紀における楽譜と演奏との関係を弁論になぞらえる（音楽を弁論になぞらえるのは、十八世紀から十九世紀へと継承された考え方であった）。楽譜は弁論におけるメモのようなものであり、演奏（弁論における actio に相当する Vortrag）において臨機応変に改変することを妨げるようなものではなかった、ということである。

論文の冒頭にある、旧来の作品概念の批判には、やや一面的な理解が見られ、批判の標的とした学説はいささかレトリカルに呈示されているなどの問題点がないわけではない。しかし、上記の主要部分の議論は堅固な実証性に支えられた説得力をもち、特に(2)と(3)は極めて独創的な研究であり、演奏論に関する重要な寄与である。よって、これを博士（文学）の学位に値する研究と判定する。